潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連¹⁾

小 塩 真 司

中部大学人文学部

西 野 拓 朗²⁾

中部大学人文学部

速 水 敏 彦

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

本研究の目的は、他者軽視および顕在的自尊感情と、潜在連合テスト (Implicit Association Test; IAT) によって測定された潜在的自尊感情との関連を検討することによって、仮想的有能感の特徴を明らかにすることであった。研究1では大学生119名に対し、紙筆版の潜在連合テストによって潜在的自尊感情を測定し、顕在的自尊感情尺度、他者軽視に基づく仮想的有能感尺度を実施した。また研究2では、大学生155名を対象に、パーソナルコンピュータ上の潜在連合テストによって潜在的自尊感情を測定し、顕在的自尊感情尺度、仮想的有能感尺度を実施した。2つの研究ではほぼ同じ結果が再現された。まず第1に、仮想的有能感とは顕在的自尊感情とは有意な関連がみられないが、潜在的自尊感情とは有意な正の相関関係にあった。また第2に、顕在的自尊感情が低く潜在的自尊感情が高い者が、もっとも他者軽視を行う傾向にあることが示された。

キーワード：仮想的有能感、潜在的自尊感情、顕在的自尊感情

問 題

現代の日本は、競争社会化する中で人々の勝ち負けが明確になり、社会階層の格差も広がりつつあるように思われる。このような現代社会には、自分の権利を主張することばかりに労力を費やし、その一方で他者の立場を配慮したり、共感的に理解したりすることを軽んじる傾向が蔓延しているのかもしれない。速水(2006)は、人々がこのような社会を乗り越えるすべを既に身につけていると述べている。それは、仮想的有能感 (assumed-competence) と呼ばれるものを介してである。この仮想的有能感とは、“自己の直接的なポジティブ

経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚”と定義されている(速水・木野・高木, 2004)。

速水他(2004)は、仮想的有能感を測定するために、Assumed-Competence Scale (ACS)を開発している。また、Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan (2004)はACSを改訂し、version 2となる尺度(ACS-2)を作成している。速水(2006)によると仮想的有能感とは、他者軽視を通して、無意識のうちに真実でない仮想的な有能感を得ようとするという潜在的なプロセスを含むものである。そのため、質問紙によって仮想的有能感を直接的に測定することは困難であるとされる。そこでACSでは、個人が他者をどの程度軽視するかを測定することによって、部分的かつ間接的に仮想的有能感の程度を測定することを試みている。なお以下では、ACSが他者軽視の程度を測定することに注目し、速水・小平(2006)および小平・小塩・速水(2007)

1) 本研究は、第1著者の指導のもとで第2著者が執筆した卒業論文の結果の一部にもとづいて、第1著者が再構成したものである。また本論文の研究1の結果は、東海心理学会第56回大会において発表されたデータを再分析したものである。

2) 第2著者の現在の所属：テンブロス株式会社

と同様に、この尺度を他者軽視尺度と呼ぶこととする。

仮想的有能感の部分的・間接的な指標としての他者軽視尺度の妥当性に関しては、これまでにいくつかの研究が行われており、一定の妥当性が示されている。たとえば速水・木野・高木 (2005) は他者軽視尺度の項目に合致する人物像を尋ね、非現実的に有能感の高い人物像が記述されることが多いことを報告している。また高木・速水・木野 (2004) では、高校生の自己評定による他者軽視尺度得点と担任教師が評定した得点との間に、ある程度の一致がみられることが確認されている。

これまでの研究において、他者軽視尺度と Rosenberg (1965) の自尊感情尺度とは、ほぼ無関連であることが繰り返し報告されている (速水・小平, 2006 ; 速水他, 2005 ; Hayamizu et al., 2004 ; 小平他, 2007)。自尊感情とは、自己に対する肯定的あるいは否定的態度 (遠藤・井上・冷川・藤原, 1981) であり、特に Rosenberg (1965) の自尊感情尺度は“これでよい (good enough)”という自己に対する感覚を測定する。速水・小平 (2006) や小平他 (2007) では、仮想的有能感の典型、すなわち自信や高い自己評価に裏づけられていない他者軽視傾向を抽出するために、他者軽視の高さと自尊感情の高さを組み合わせた4類型を想定して分析を行っている。これらの研究では、他者を軽視する傾向が高く自尊感情が低い「仮想型」を、仮想的有能感の典型として扱っている。そして、この仮想型に属する者は、外的動機づけや取り入的動機づけといった自律性の低い動機づけが高い傾向にあること (速水・小平, 2006) や、日常的に不安定で強い抑鬱感情や敵意感情を感じる傾向にあること (小平他, 2007)、またこの型が中学生や高校生で顕著にみられること (Hayamizu, Kino, & Takagi, 2007) などが明らかにされている。

ところで、他者軽視を通して真実でない仮想的有能感を得ようとするのが仮想的有能感のプ

ロセスのひとつと考えられるが、他者を軽視する傾向と仮想的有能感との関係は相互に影響を与え合うような関係であるとも考えられる。速水 (2006) は、他者軽視と仮想的有能感のメカニズムについて、“個人的経験や社会・文化的要因によって、無意識に仮想的有能感が形成されると、対人場面で他者軽視が表面化する”そして“人を馬鹿にした態度や行動をとることによって、仮想的有能感が強化され、このような繰り返しの中で仮想的有能感が一層強固なものになっていく” (p. 119) と述べている。この記述からもわかるように、仮想的有能感は本人にとって意識可能なものとは限らず、他者軽視という他者認知傾向の裏側に隠された自己認知傾向であることが仮定されている。

近年、人の態度や行動には意識的な部分 (顕在的態度) と非意識的な部分 (潜在的態度) の双方が影響するということが明らかにされており、このような潜在的な態度が人の考えや行動に果たす役割に注目が集まっている。潜在的態度とは“社会的対象に対する好意的 (非好意的) 感情・思考・行為を媒介する、内省的に (あるいは正確に) 識別できない過去の経験の痕跡” (Greenwald & Banaji, 1995, p. 8) であり、また対象概念と感情価との間の連合 (Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellott, 2002) であるといわれる。そしてこれまでの研究から、自己を含む様々な対象について、顕在的な態度だけではなく潜在的な態度が存在することが確かめられてきている。

このような潜在的態度を測定する代表的な手法が潜在連合テスト (Implicit Association Test; IAT; Greenwald, McGhee, & Schwarz, 1998) である。IAT は連続的に提示されるターゲットを2つのカテゴリに分類する試行を繰り返し、各試行で判断に要した時間を測定することによって、潜在的な態度を測定するものである。IAT は本来、コンピュータを用いた反応時間の測定から潜在的な態度を測定するものであるが、紙に印刷された刺激語を制限時間内にできるだけ多く分類することを調査対

象者に求めることによって概念間の結合の強さを測定する、紙筆版 IAT も開発されている。たとえば岡部・木島・佐藤・山下・丹治 (2004) は、超能力信奉傾向を IAT によって測定する際に、PC 版の IAT と紙筆版の IAT を作成し、両者を比較している。そして、両者の間には正の相関関係があり (2 回の調査においてそれぞれ $r=.64$ と $r=.46$, $p<.01$), 平均反応時間の傾向も類似していたことを示している。このことから、PC 版と紙筆版の IAT はある程度類似した傾向を測定している可能性が示唆される。

また近年では、IAT を用いた潜在的自尊感情の測定も行われている。潜在的自尊感情は、自己関連語 (「自分は」「私は」など) とポジティブ語の結びつきおよび他者関連語 (「他者」「他人」など) とネガティブ語の結びつきの強さと、自己関連語とネガティブ語の結びつきおよび他者関連語とポジティブ語の結びつきとの差を算出することによって測定される。そしてこれまでの研究から、潜在的自尊感情は質問紙によって測定される自尊感情 (顕在的自尊感情) とはほぼ無相関であることが報告されている (Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000)。このように両者が無相関の関係にあることから、両者が意味する内容が異なることが示唆される。そしてこれまでの検討から、顕在的自尊感情が意識的な自己に対する好意、自己価値、自己受容といった感覚である一方で、潜在的自尊感情は非意識的で自動的、継続的かつ過剰に学習された (overlearned) 自己評価であると考えられている (Zeigler-Hill, 2006)。

また、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の組み合わせの効果も注目されている。たとえば、顕在的自尊感情が高く、潜在的自尊感情が低い者は、そうでない者よりも防衛的で自己高揚的な傾向を示す (Bosson, Brown, Zeigler-Hill, Swann, 2003; Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003; McGregor & Marigold, 2003)。その一方で、顕在的自尊感情が低く潜在的自尊感情が高い者

は、良い出来事の後には肯定的な自己像を、悪い出来事の後には否定的な自己像をもつなど、自己に関連する出来事に敏感であるという (Jordan, Whitfield, & Zeigler-Hill, 2007)。

仮想的有能感という概念には潜在的な有能感、すなわち潜在的な自己に対するポジティブな態度が含まれることが仮定されていることから、この概念と潜在的自尊感情との関連が示唆される。そこで本研究では、仮想的有能感が潜在的自尊感情とどのような関係にあるのかを検討したい。

先行研究で明らかにされているように、他者軽視と顕在的自尊感情、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情とはほぼ無相関である。では、潜在的自尊感情と他者軽視の間にはどのような関連がみられるのであろうか。もしも速水 (2006) が仮定するように、他者軽視が仮想的有能感の間接的な指標であり、他者軽視のプロセスにおいて、潜在的な自尊感情であらわされる非意識的な自己に対する肯定的な態度が関与するのであれば、両者の間には正の関連がみられることが予想される。

また先行研究では、他者軽視が高く顕在的自尊感情が低い仮定型に属する者が、典型的な仮想的有能感のもち主とされてきた (速水・小平, 2006 ; 小平他, 2007)。もしも、潜在的自尊感情が仮想的有能感に伴う潜在的な自己肯定的態度に関連するのであれば、先行研究における仮定型を、潜在的自尊感情が高く顕在的自尊感情が低い者であるとも考えることも可能であろう。したがって、このような者がもっとも他者軽視の傾向を示すことが予想される。

以上の観点から、本研究では潜在的自尊感情、顕在的自尊感情、他者軽視という3者の関連を検討する。そしてこの検討を通じて、仮想的有能感という概念を理解するための枠組みを得ることを目的とする。なお本研究では、研究1において紙筆版の IAT、研究2において PC 版の IAT による潜在的自尊感情の測定を行い、これら2つの手法間において、顕在的自尊感情および他者軽視との関

連が再現されるかどうかにも着目したい。紙筆版 IAT と PC 版 IAT はある程度類似した心理学的特徴を測定するとはいえ、手法が異なることから完全に一致するものではない。異なる手法間で安定した結果が得られるかどうかを検討することによって、仮想的有能感の理論的考察に対して、より確実な理解の枠組みが得られることが期待される。

研究 1

目的

紙筆版 IAT (Paper and pencil version of the Implicit Association Test; Greenwald, 2000; 日本語版は村上, 私信 2007³⁾) を用いて潜在的自尊感情を測定し、顕在的自尊感情および他者軽視との関連を検討する。

方法

紙筆版 IAT による潜在的自尊感情の測定

1. 実施手続き：調査対象者に以下で説明する紙筆版 IAT の冊子を配布した後、実験者の合図に基づいて各ページをめくりながら課題を行うよう指示した。なお調査対象者には、言葉の分類に関する実験を行うと告げた。分類課題の教示として、ページ中央に並んだ言葉が左右の概念のどちらに属するかを判断し、言葉の左右の括弧のうち該当する側の括弧に印をつけるように教示した。また、その際にできるだけ正確に数多く分類するように求めた。各分類課題についての制限時間は 20 秒とした。紙筆版 IAT が終了した後で、他者軽視尺度および自尊感情尺度への回答を求めた。全調査終了後に、本調査の本来の目的を説明した。

2. ブロック：紙筆版 IAT は以下の 7 ブロックで構成されていた (Figure 1)。各ブロックは対象概念「自分－他人」と、属性概念「快－不快」の組み合わせとなっていた。すなわち、第 1 ブロックは練習課題（自分－他人）、第 2 ブロックは練習課

第 1 ブロック：練習課題			
自分	☒	自分は	☐
	☐	他者	☒
第 2 ブロック：練習課題			
快い	☒	あかるい	☐
	☐	くらい	☒
第 3 ブロック：練習一致課題			
第 4 ブロック：本番一致課題			
自分 または 快い	☒	自分は	☐
	☒	あかるい	☐
	☐	他者	☒
	☐	くらい	☒
第 5 ブロック：練習課題			
不快な	☐	あかるい	☒
	☒	くらい	☐
第 6 ブロック：練習不一致課題			
第 7 ブロック：本番不一致課題			
自分 または 不快な	☒	自分は	☐
	☐	あかるい	☒
	☐	他者	☒
	☒	くらい	☐

Figure 1 紙筆版 IAT の各ブロックの例

題（快－不快）、第 3 ブロックは練習一致課題（自分・快－他人・不快）、第 4 ブロックは本番一致課題（自分・快－他人・不快）、第 5 ブロックは練習課題（不快－快）、第 6 ブロックは練習不一致課題（自分・不快－他人・快）、第 7 ブロックは本番不一致課題（自分・不快－他人・快）であった。これらのうち第 3・第 4 ブロックは自尊感情に一致する組み合わせ（一致課題）であり、第 6・第 7 ブロックは自尊感情に一致しない組み合わせ（不一致課題）である。第 1・第 2 ブロックの練習課題は IAT 課題そのものに慣れるため、第 5 ブロックの練習課題は、チェックすべき属性概念の方向が変わることに慣れるために行われた。ブロックの順序が反応時間に影響することを考慮し、一致課題と不一致課題の順序効果を相殺する必要がある。そこで一致課題を先にする場合は第 1 から第 7 までは順番に実施し、不一致課題を先にする場合には第 1, 第 5 から第 7, 第 2 から第 4 の順に実施した。

3. 刺激語の内容：対象概念「自分－他人」および属性概念「快－不快」の内容は Table 1 に示す通りであった。自分に関する刺激語として「自

3) 村上史朗 (2007 年 1 月 17 日) 紙筆版 IAT に関して e-mail による私信。

Table 1 紙筆版 IAT で使用した刺激語

対象概念		属性概念	
自分	他人	快い	不快な
自分は	他者	あかるい	くらい
自分の	他者の	うつくしい	つめたい
私は	他人は	かしこい	おろかな
私の	他人の	しょうじきな	うそつきな
私と	他人と	ようきな	いんきな

分は」「自分の」「私は」「私の」「私と」の5語、他人に関する刺激語として「他者」「他者の」「他人は」「他人の」「他人と」の5語を使用した。また、快に関する刺激語として「あかるい」「うつくしい」「かしこい」「しょうじきな」「ようきな」の5語、不快に関する刺激語として「くらい」「つめたい」「おろかな」「うそつきな」「いんきな」の5語を用いた。

4. 冊子の構成：各ブロックはA4用紙1枚で構成されていた。各ブロックに相当するそれぞれのページでは、分類する刺激語を中央に並べ、その左右に回答用の括弧を配置し、ページの両端には分類する概念名を記述した。また、各ページの刺激語数は40項目とし、同じ刺激語を複数回使用した。各ブロックに対応する対象概念および属性概念の各刺激語は、ランダムに配置された。各ページの下には、次ページで行う課題についての教示を記述した

質問紙尺度について

1. 他者軽視尺度：Hayamizu et al. (2004) で作成された仮想的有能感尺度 (version 2; ACS-2) を、他者軽視尺度として使用した。この尺度は「自分の周りには気のきかない人が多い」「他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる」など11項目で構成されている。回答は「全く思わない」から「よく思う」までの5段階で求めた。本研究では、速水・小平 (2006) や小平他 (2007) と同様に、自尊感情を考慮した有能感の類型との混同を避けるため、この尺度を他者軽視尺度と呼ぶこととす

る。

2. 自尊感情尺度：顕在的自尊感情として、Rosenberg (1965) によって作成され、桜井 (1997) が星野 (1970) の翻訳を修正した10項目を使用した。回答は「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの5段階で求めた。

調査対象者・調査時期

調査は愛知県内の大学生121名に対し、2007年1月に講義時間を利用して一斉に行われた。質問紙部分に欠損値がみられた2名を除く119名（男性72名、女性47名）のデータを以降の分析に用いた。平均年齢は20.24 ($SD=0.90$) 歳であった。なお紙筆版 IAT について、岡部他 (2004) を参考に、第4ブロックと第7ブロックについてそれぞれ誤反応率を算出し、誤反応率が20%を超える調査対象者が存在するかどうかを検討したところ、この119名の中に誤反応率が20%を超える者はいなかった。

結果と考察

紙筆版 IAT における「自己」と「快」の組み合わせの連合課題の回答数から、「自己」と「不快」の組み合わせの連合課題の回答数を引いたものを潜在的自尊感情得点とした（平均11.58、標準偏差6.23）。IAT量の大きさを評価するために、Cohen (1988) の d 値を算出したところ、 $d=1.83$ であった。Cohen (1988) は、0.8以上の d 値をもって大きな効果であるとしていることから大きなIAT量が確認できたといえる。

また他者軽視尺度と自尊感情尺度については項目の平均値を算出し、他者軽視尺度得点 ($M=2.83$, $SD=0.57$)、顕在的自尊感情尺度得点 ($M=3.06$, $SD=0.71$) とした。なお、内的整合性を検討するために各尺度の α 係数を算出したところ、他者軽視で $\alpha=.72$ 、顕在的自尊感情で $\alpha=.85$ と十分な値が得られた。

3つの尺度間の相関関係をTable2に示す。他者軽視と顕在的自尊感情、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の間には有意な相関はみられなかったが、

Table 2 他者軽視、顕在的自尊感情および紙筆版 IAT による潜在的自尊感情との関連

	他者軽視	顕在的 自尊感情	潜在的 自尊感情
他者軽視	—	.03	.21*
顕在的自尊感情		—	.03
潜在的自尊感情			—

* $p < .05$

他者軽視と潜在的自尊感情との間には有意な正の相関 ($r = .21, p < .05$) がみられた。高い相関係数ではないものの、この結果は、他者軽視傾向が潜在的な自己肯定的態度に関連することを意味している。

次に、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の高低による他者軽視得点を検討した。まず、それぞれの自尊感情の平均値を基準として、各自尊感情の高群と低群に分類した。なお、顕在的自尊感情低・潜在的自尊感情低群は 26 名、顕在的自尊感情低・潜在的自尊感情高群は 27 名、顕在的自尊感情高・潜在的自尊感情低群は 34 名、顕在的自尊感情高・潜在的自尊感情高群は 32 名であった。そして、顕在的自尊感情の高低と潜在的自尊感情の高低を独立変数、他者軽視得点を従属変数とした 2×2 の分散分析を行った。その結果、有意な交互作用がみられた ($F(1,116) = 5.69, p < .05$)。Figure 2 に 4 群の他者軽視得点の平均値を示す。交互作用が有意であったことから単純主効果の検定を行ったところ、顕在的自尊感情低群における潜在的自尊感情の単純主効果が有意であった ($F(1,116) = 8.34, p < .01$)。したがって、顕在的自尊感情が低い場合には、潜在的自尊感情が低い者よりも高い者の方が他者軽視をする傾向にあることが示された。

以上のように、顕在的自尊感情が低い時は高い時よりも、潜在的自尊感情の高低が他者軽視に対してより大きく関連することが示された。この結果は、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の組み合わせの元で、他者軽視傾向がより大きく生起する

Figure 2 顕在的自尊感情・潜在的自尊感情（紙筆版 IAT による）高低別の他者軽視得点

ことを示唆している。

しかしながら、研究 1 では紙筆版 IAT という、いわば簡易的な手法を用いて潜在的自尊感情を測定している。そこで研究 2 では、PC 版の IAT を用いて潜在的自尊感情を測定し、研究 1 と同様の結果が得られるかどうかを検討する。

研究 2

目的

PC 版 IAT を用いて測定した潜在的自尊感情と顕在的自尊感情および仮想的有能感との関連を検討する。

方法

PC 版 IAT による潜在的自尊感情の測定 刺激の呈示および反応時間の測定は Millisecond Software 社の Inquisit (ver. 2.0) を用いた。対象概念、属性概念、刺激語は研究 1 と同じものを用いた (Table 1 参照)。PC 版 IAT は紙筆版 IAT と同様に 7 ブロックで構成され (Figure 1 参照)、いずれのブロックにおいても PC 画面上に提示される刺激語がどのカテゴリに属するかをキー押しで回答させる課題を実施した。刺激語の提示順序は各ブロックでランダムになるようにした。反応に要した時間を記録した。回答キーには「d」「k」キーを使用し、左右の人差し指での回答を求めた。各ブ

ロックにおける課題実施の手順は PC 画面上に提示し、手順がわからなければ他の実験参加者の邪魔にならないように静かに実験者にたずねるようにと教示した。研究 1 と同様に一致課題と不一致課題の実施順序は、参加者ごとランダムになるようにした。一致・不一致課題のブロック（第 3・第 4・第 6・第 7 ブロック）は 32 試行、その他のブロックは 16 試行で構成されていた。いずれのブロックにおいても正答の場合には次の刺激語が呈示され、誤答の場合にはフィードバック（赤色で“×”印の提示）を行った。実験参加者は正答のキーを押すと、次の刺激語が呈示されるように教示されていた。なお、試行間隔は 200 ms であった。

質問紙尺度について 他者軽視尺度および顕在的自尊感情を測定するための自尊感情尺度については、研究 1 と同じものを用いた。

実験参加者・実験時期 愛知県内の大学生 158 名に対して実験を行い、欠損値のあるデータを除いた 155 名（男性 89 名、女性 66 名）分のデータを分析に用いた。平均年齢は 19.34（標準偏差 1.39）歳であった。実験は 2007 年 6 月から 7 月にかけて行われた。なお、これらの実験参加者は研究 1 とは異なっていた。

手続き PC 版の IAT は実験室内にブースを設け、1 名から 4 名の個別および小集団で実施する形式をとった。実験参加者は PC 版の IAT を終了後、質問紙に回答を行った。

結果と考察

PC 版 IAT のデータについては Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) の基準にしたがって整理した。全体の IAT 量（不一致条件から一致条件の値を減算した値）は、274.17 ms ($SD=157.55$) であった。IAT 量の大きさを評価するために、Cohen (1988) の d 値を算出したところ、 $d=1.71$ であった。0.8 以上の d 値が得られたことから、十分な IAT 量が確認できたといえる。なお以降では、 D 値 (Greenwald et al., 2003) を算出し、潜在的自尊感情の指

標とした。この値は、一致課題と不一致課題のブロックの反応時間の差を、両ブロック全体の反応時間の標準偏差で除したものである。この値を IAT 量の指標として用いることの妥当性は、Greenwald et al. (2003) において示されている。 D 値として算出された潜在的自尊感情得点の平均値は 0.85、標準偏差は 0.32 であった。

他者軽視尺度、顕在的自尊感情尺度の項目の平均値を算出し、他者軽視尺度得点 ($M=2.90$, $SD=0.65$)、顕在的自尊感情尺度得点 ($M=2.82$, $SD=0.67$) とした。なお、内的整合性を検討するために各尺度の α 係数を算出したところ、他者軽視で $\alpha=.83$ 、顕在的自尊感情で $\alpha=.81$ と十分な値が得られた。

他者軽視尺度と顕在的自尊感情、PC 版 IAT によって得られた潜在的自尊感情との関連を Table 3 に示す。他者軽視と顕在的自尊感情、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情はほぼ無相関であったが、他者軽視と潜在的自尊感情との間に有意な正の相関 ($r=.22$, $p<.01$) がみられた。

次に研究 1 と同様に、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の高低による他者軽視得点を検討した。まず、それぞれの自尊感情の平均値を基準として、各自尊感情の高群と低群に分類した。顕在的自尊感情低・潜在的自尊感情低群は 39 名、顕在的自尊感情低・潜在的自尊感情高群は 46 名、顕在的自尊感情高・潜在的自尊感情低群は 29 名、顕在的自尊感情高・潜在的自尊感情高群は 41 名であった。

顕在的自尊感情の高低と潜在的自尊感情の高低

Table 3 他者軽視、顕在的自尊感情および PC 版 IAT による潜在的自尊感情との関連

	他者軽視	顕在的自尊感情	潜在的自尊感情
他者軽視	—	-.10	.22**
顕在的自尊感情		—	.03
潜在的自尊感情			—

** $p<.01$

Figure 3 顕在的自尊感情・潜在的自尊感情（PC版 IAT による）高低別の他者軽視得点

を独立変数、他者軽視得点を従属変数とした 2×2 の分散分析を行ったところ、潜在的自尊感情の主効果 ($F(1,151)=5.99, p<.05$)、および交互作用が認められた ($F(1,151)=6.96, p<.01$)。Figure 3 に 4 群の他者軽視得点の平均値を示す。交互作用が有意であったことから単純主効果の検定を行ったところ、顕在的自尊感情低群における潜在的自尊感情の単純主効果 ($F(1,151)=14.51, p<.001$)、潜在的自尊感情高群における顕在的自尊感情の単純主効果 ($F(1,151)=6.37, p<.05$) が有意であった。したがって、顕在的自尊感情が低い場合には、潜在的自尊感情が低い者よりも高い者の方が他者軽視をする傾向にある一方で、顕在的自尊感情が高い場合には潜在的自尊感情によって他者軽視得点に有意な差がみられないことが示された。また、潜在的自尊感情が高い場合には、顕在的自尊感情が高い者よりも低い者の方が他者軽視をする傾向にある一方で、潜在的自尊感情が低い場合には顕在的自尊感情の高低で他者軽視得点に有意な差はみられなかった。これらの結果は、顕在的自尊感情が低く、潜在的自尊感情が高い場合に、もっとも他者軽視傾向が高まる可能性を示唆するものであると考えられる。

以上のように、研究 2 では研究 1 とは異なる調

査参加者に対して PC 版の IAT を利用した潜在的自尊感情の測定を行ったが、潜在的・顕在的自尊感情と他者軽視傾向との関係は、研究 1 で得られた結果とほぼ同様であった。したがって、これら 3 つの概念間の関連は、比較的安定したものであると考えられる。

総合考察

研究 1 および研究 2 の結果より、第 1 に他者軽視傾向は潜在的自尊感情と低いながらも有意な正の関連を示すことが明らかにされた。この結果は、他者軽視が仮想的有能感の部分的、間接的な指標であるという速水 (2006) の洞察を支持するものであると考えられる。

また第 2 に、顕在的自尊感情が低い場合に、潜在的自尊感情が他者軽視傾向に大きく関連することが明らかにされた。先行研究（速水・小平, 2006；小平他, 2007）では、他者軽視が高く顕在的自尊感情が低い「仮定型」の者が、典型的な仮想的有能感のもち主とされてきた。潜在的自尊感情が、仮想的有能感に関連する潜在的な自己に対する肯定的態度をある程度反映するのであれば、顕在的自尊感情が低く潜在的自尊感情が高い者よりも他者軽視の傾向を示すと予想された。研究 1 および研究 2 では、完全ではないものの、この予想をある一定の方向で支持する結果が得られたと考えられる。

潜在的自尊感情は自己と肯定的な感情価（すなわち快）との非意図的な連合であり、顕在的自尊感情は具体的な自己像や自己に関連する出来事に対する肯定的な評価であると解釈することが可能である。したがって本研究の結果より、自己に対する肯定的な感情価はもちつつも、具体的な自己像に対しては否定的な評価を抱く傾向にある者よりも他者軽視傾向を強く示すと考えられる。

これまでに Hayamizu et al. (2004) は、他者軽視および自尊感情と、過去の成功経験・失敗経験との関連を検討している。そして、自尊感情が過去

の成功経験と正の、失敗経験と負の関連を示していたのに対し、他者軽視は過去の成功経験と関連がみられず、人間関係に関するいくつかの失敗経験と低い正の関連がみられたことを報告している。このことから速水(2006)は、自尊感情が過去の具体的な成功経験に基づくものであり、(仮想的有能感の反映としての)他者軽視は過去の成功経験に基づかないものであると述べている。本研究の結果は、以上のようなこれまでの仮想的有能感の研究結果に対し、重要な示唆を与えるものであると考えられる。本研究では、他者軽視が潜在的自尊感情に関連することが示された。この関連は、他者軽視を伴う仮想的有能感の形成過程において、自己と快の連合を形成する評価的条件づけの効果(Baccus, Baldwin, & Packer, 2004)など、非意図的な学習過程が関与している可能性を示唆するものである。たとえば速水(2006)は、社会そのものに自己否定する人を避け、自己肯定する人を受容する風潮が広まることによって、各個人の生活の中で本人も自覚しないうちに仮想的有能感が形成される可能性について述べているが、これはまさに非意図的な学習過程といえるだろう。そして、仮想的有能感の学習過程が非意図的なものであるために、仮想的有能感の反映としての他者軽視が、具体的な成功経験の想起と関連しないという結果が得られているのではないだろう。

また Hayamizu et al. (2004) で示されたように、なぜ自尊感情が過去の失敗経験と負の関連をする一方で、他者軽視は過去の失敗経験と正の関連をするのだろうか。本研究で得られた知見から、次のような解釈を行うことができる。誰でも、身近で具体的な出来事を想起するときに、失敗経験ばかりが想起されることがある。そのような場合には、具体的な失敗経験の想起が顕在的自尊感情を低下させるが、潜在的自尊感情は具体的な失敗経験にあまり影響を受けないため、両自尊感情間に差が生じることが予想される。本研究では、顕在的自尊感情が低く、潜在的自尊感情が高いときに

他者軽視が高くなる傾向が見いだされたが、他者を軽視する傾向は、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の差を埋めるための、防衛的な役割をもつものかもしれない。

本研究は、これまでの仮想的有能感研究で取り上げられてこなかった潜在的自尊感情に焦点を当て、実際に関連することを示したという点、そして仮想的有能感という概念を潜在的自尊感情という枠組みを用いて解釈する可能性を示したという点に意義があると考えられる。本研究の結果のみでは、他者軽視および仮想的有能感、潜在的・顕在的自尊感情の関係がどのようなものであるのかについて、明確な結論を下すことはできない。上記で論じたような可能性を詳細に検討していくことは、他者軽視を伴う仮想的有能感の特徴を明らかにする上で非常に重要であると考えられる。そのためには、縦断的な検討を含めたさらなる研究を行っていかなければならない。

なお、潜在的自尊感情に関しては、その解釈や形成過程など、まだ明確ではない部分が数多く残されている。今回の検討で得られた結果は、あくまでも今回使用した刺激語によって得られたという点にも留意する必要があるだろう。また、潜在的自尊感情の測定は IAT 以外の手法でも行われている。今後は他の刺激語を用いた検討や、他の潜在的自尊感情の測定方法を使用して検討を重ねていく必要があるだろう。

引用文献

- Baccus, J. R., Baldwin, M. W., & Packer, D. J. (2004). Increasing implicit self-esteem through classical conditioning. *Psychological Science*, **15**, 498-502.
- Bosson, J. K., Brown, R. P., Zeigler-Hill, V., & Swann, W. B. (2003). Self-enhancement tendencies among people with high explicit self-esteem: The moderating role of implicit self-esteem. *Self and Identity*, **2**, 169-187.
- Bosson, J. K., Swann, W. B., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 631-643.

- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences*. 2nd ed. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 遠藤辰雄・井上祥治・冷川昭子・藤原正博 (1981). 自尊感情の測定 遠藤辰雄 (編) *アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版 pp. 64-84.
- Greenwald, A. G. (2000). Paper and pencil version of the Implicit Association Test. Unpublished manuscript.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. (2002). A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, **109**, 3-25.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwarz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. an improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- 速水敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **51**, 1-7.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感——自尊感情との比較から—— 感情心理学研究, **12**, 43-45.
- Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2007). Effects of ages and competence type on the emotions: Focusing on sadness and anger. *Japanese Psychological Research*, **49**, 211-221.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127-135.
- 速水敏彦・小平英志 (2006). 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, **14**, 171-180.
- 星野 命 (1970). 感情の心理と教育 児童心理, **24**, 1445-1477.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- Jordan, C. H., Whitfield, M., & Zeigler-Hill, V. (2007). Intuition and the correspondence between implicit and explicit self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **93**, 1067-1079.
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験——抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して—— パーソナリティ研究, **15**, 217-227.
- McGregor, I., & Marigold, D. C. (2003). Defensive zeal and the uncertain self: What makes you so sure? *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 838-852.
- 岡部康成・木島恒一・佐藤 徳・山下雅子・丹治 哲 (2004). 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討——大学生の超能力信奉傾向を題材として—— 文教大学人間科学部人間科学研究, **26**, 145-151.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 桜井茂男 (1997). 現代に生きる若者たちの心理——嗜癖・性格・動機づけ—— 風間書房
- 高木邦子・速水敏彦・木野和代 (2004). 仮想的有能感尺度の妥当性検討 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 33.
- Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability. *Journal of Personality*, **74**, 119-143.

Implicit and Explicit Self-esteem Discrepancy and Assumed Competence

Atsushi OSHIO¹, Takuro NISHINO¹ and Toshihiko HAYAMIZU²

¹ Department of Psychology, Chubu University

² Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2009, VOL. 17 No. 3, 250–260

Two studies examined the relationships among assumed competence based on undervaluing others, implicit self-esteem, and explicit self-esteem. In Study 1, 119 university students completed paper-and-pencil version of Implicit Association Test (IAT) to measure their implicit self-esteem, in addition to scales of self-esteem and assumed competence. In Study 2, 155 university students completed computer-based IAT to measure their implicit self-esteem. Two basic findings emerged from the studies. First, assumed competence had a positive correlation with implicit self-esteem, although it had no significant correlation with explicit self-esteem. Second, people with low explicit and high implicit self-esteem showed a higher level of undervaluing others than the other groups.

Key words: assumed competence, implicit self-esteem, explicit self-esteem